

豊田工業大学卒業式・修了式（2026年3月19日）学長告辞

本日ここに令和7年度卒業式・修了式を挙げるに当たり、卒業生と修了生の皆さん、および卒業生・修了生をこれまで支えて来られたご家族の皆様、心からのお祝いを申し上げます。また、ご多用の中ご臨席賜ったトヨタ自動車中嶋裕樹副社長を初めとするご来賓の皆様、厚く御礼申し上げます。今年度、本学は、学部卒業生として87名を送り出しますが、内7名は社会人学生で、出身企業に復帰します。また、80名の一般学生の内、23名が就職し、57名が修士課程に進みます。他方、大学院修士課程では、54名の学生が修了を迎え、52名が就職し、2名が博士課程に進学します。また、博士課程では、今年度4名が既に学位を取得し、それぞれ企業・大学に就職しています。内1名は本日この場に出席されています。

さて、皆さんは、これまで本学の学部や大学院において、一人一人がそれぞれの苦勞や困難を乗り越えて、ここに卒業・修了の日を迎えました。皆さんの努力に対し、教職員を代表して深い敬意を表します。同時に、皆さんがこの日を迎えられたのは、ご家族やご親族など、ここまで育て支援して下さった方々のおかげでもあります。今日受け取る卒業証書・修了証書をこの後、皆さんを支えてくださった方々にお見せして、感謝の言葉を伝えて頂きたいと存じます。

皆さんは今から、社会人として、モノづくりやサービスの提供、研究開発などに従事し、社会に支えられる立場から社会を支える立場になります。就職する諸君は、仕事への対価として給与を得て、自分や家族を支え、税金を納め、国や国際社会を支える立場に変わります。大学院への進学者は、学生の身分こそ残るものの、研究者として独り立ちし、知的な産物を生み出す社会的役割を担う立場になります。米国では、今日のような式典を「コメンズメント」と言います。意味は「始まり」です。「しまい」ではありません。今日この日は、皆さんの人生の最大の転換点、いわば大海原への船出の日です。本学で培った「考える力」を信じて、海図のない大海原を航海して行ってください。

一方で、皆さんを待ち受けている海原は、目下大しけの状況です。お祝いの日にはあまり相応しくない話題ですが、ウクライナ侵攻、ガザ侵攻、ベネズエラ侵攻、イラン戦争と続き、力による支配がまかり通る大変危険な情勢になっています。世界大戦の悲劇を繰り返さないために、国連を中心に築いてきた国際法に基づく平和維持の仕組みが今踏み躪られています。これらの紛争に共通するのは、少数の独裁的指導者が、

利己的な目的で、意図的に、かつ甘い見通しで引き起こしているものだという事です。しかしその結果、もともと全く無関係の一般市民が戦争に巻き込まれて行ってしまうというのが非常に深刻な問題です。日本も巻き込まれてしまう瀬戸際にあることは、日々の報道でご存知の通りです。日本の考える力と主体性が今試されています。

そして戦争で真っ先に危険に晒されるのは若者です。今日卒業・修了される皆さんと同年代の人が前線に送られ、殺し殺される一番の当事者になってしまうのです。せっかく大学や大学院を修了しても、戦争に駆り出されてはもともともありません。あたり前のように享受していた「平和」がかくも簡単に壊されてしまうことを目の当たりにして、平和は人から与えられるのではなく、自分で守るものであることを改めて自覚する必要があります。民主主義が皆さんに与えてくれている政治に参画する力を行使して、これからの時代も、皆さん自身で平和を守り抜いて頂きたく存じます。

話は大きく変わりますが、南米チリの小説家にルイス・セプルベダという人がいて、1996年の作品に『カモメに飛ぶことを教えた猫』という童話があります。私自身数年前の新聞のコラム記事で知りました。そのクライマックスで、黒猫ゾルバがヒナのカモメに向けて「飛ぶことができるのは、心の底からそうしたいと願った者が、全力で挑戦したときだけだ」と教える場面が出てきます。原油流出事故で瀕死のカモメから卵を託された黒猫ゾルバが、仲間と協力してヒナを育て、最後には、猫がヒナに飛ぶことを教える物語だそうです。

今日この日に、皆さんにこの猫の言葉を「はなむけ」の言葉として捧げたいと思います。南米の童話に出てくる猫の言葉が「はなむけ」なんて変ですよ。しかしこの言葉には、皆さんのこれからの人生を幸せにする鍵が隠されていると思います。もう一度繰り返すと、

「飛ぶことができるのは、心の底からそうしたいと願った者が、「楽しく」全力で挑戦したときだけだ」

さきほどの原文に、私が勝手に「楽しく」という言葉を足しました。自分自身が心の底からそうしたいと思っていれば、どんな困難にも挑戦できるし、その結果として高みに到達できる、ということです。敢えて「楽しく」を足したのは、挑戦することは本質的には「楽しい」こと、「心躍る」ことであるべきだと考えるからです。例えば、マラソンは苦しいですが、何故やるのかと言えば、好きだから、楽しいからです。大谷翔平選手も、野球が心底好きだから、楽しいから、心が躍っている状態だから、頑張れるのだと思います。野球に限らず、何かに挑戦する時、普遍的な力を持った原

理だと思います。逆に言えば、同じことでも「やらされている」という意識で取り組めば、結果は全然ついてこないということも意味しています。

ほとんどの皆さんはこれから、技術や研究の分野を舞台にプレーすることになります。そこで主に働かすのは、いうまでもなく頭脳です。頭脳も筋肉と同様に鍛えれば鍛えるだけ逞しくなりますが、その能力、特に創造性を司る部分には年齢による限界があります。スポーツ選手の多くは20代でピークを迎えて、どんなに頑張っても30代後半には現役を引退します。創造力も同じだということです。頭脳プレーヤの代表格として将棋の藤井聡太6冠がいますが、彼は現在23歳です。皆さんとほぼ同年代です。彼はまだまだ活躍するでしょうが、やはり30代後半には次の棋士に敗れるでしょう。

申し上げたかったことは、皆さんの能力も今からまさにピークに達するところであり、それはたかだか10年から20年しか生理学的に続かないということです。これからの10年間は、皆さんの脳力、別の言葉で言えば創造性が最大になる時であり、研究者、技術者の現役プレーヤとして一番活躍できる期間であるということです。ぼやぼやしていると、10年なんてあっという間に過ぎてしまいます。知らず知らずのうちに、自分の脳力の旬を逃してしまう可能性があるのです。

今からの10年間は、自分が最大限の脳力を発揮できる、人生に一度しか訪れない貴重な期間であると認識して、自身の創造力を最大限活かした大きな挑戦をし、毎日毎日を有意義に過ごして下さい。楽しみながら世界初の偉業を目指してください。偉業を実際に達成するかどうかは問題ではありません。楽しみながら挑戦することが重要なのであり、その結果がたとえ失敗だったとしても全く気にすることはありません。再度挑戦すればいいだけのことです。楽しみながら挑戦すること自体が皆さんの人生を幸せにし、引いては社会の健全な発展につながるのです。

修了生・卒業生の皆さん。これまでの研鑽を基盤として、新たな環境での経験や学びや出会いを活かすことで、自らをより大きく成長させ、一職業人として、一市民として、また一家庭人として、よき人生を送られることを心からお祈りし、私の告辞といたします。あらためまして、本日は誠におめでとうございます。

2026年3月19日

豊田工業大学 学長 中野義昭